

富山の道 発見ガイド



道には未知がいっぱいだ。

どこへ行っても道があるし、

どこへ行くにも道を通る。

365日、道を使わない日って

たぶん、ないかもしないね。

なのに、意外と知らない道のこと。

ちょっと観察してみよう。

もっとくわしく調べてみよう。



◎道を調べるときの注意

道路にはいろんな発見がありますが、危ないこともあります。
道路や駐車場などでは車にじゅうぶん注意しましょう。
また人に何かをたずねるときは、きちんとあいさつをして、
教えてもらったあとは「ありがとうございました」の言葉を忘れないようにしましょう。

第1章

近所の道を探検してみよう

いつも通る道には何があるのだろう	6
この道はどんな道なんだろう	8
この道はいつからここにあるのだろう	10
広い道路には何があるのだろう	12
道ができた頃とどう変わったのだろう	14

第2章

道の昔へ旅してみよう

車のない時代はどうやって旅したのだろう	20
疲れたときはどこで休んだのだろう	22
道に迷うことはなかったのかな	24
街道の面影をたずねてみよう	28
どうやって川を渡ったのだろう	30
どうやって山を越えたのだろう	32
関所というのは何をするところだろう	34

第3章

道は何を運んできたのだろう

どんな人たちが道を通ったのだろう	42
どんな品物が運ばれたのだろう	44
人や品物のほかに何が運ばれたのだろう	46

第4章

今の道、これからの中

国道は今何を運んでいるのだろう	54
高速道路はどんな道だろう	56
未来の道はどんな道なんだろう	58

コラム

自動車はいつから普及し始めたのだろう	16
博物館へ出かけてみよう	38
「道」のつく言葉を探してみよう	48
道にまつわる昔話を読んでみよう	50
富山の道のうつりかわり（原始時代～江戸時代）	26
富山の道のうつりかわり（明治時代～昭和時代）	36
もっとくわしく調べよう	62
富山の道とできごと（年表）	64

特集

資料

第1章 近所の道を探検してみよう



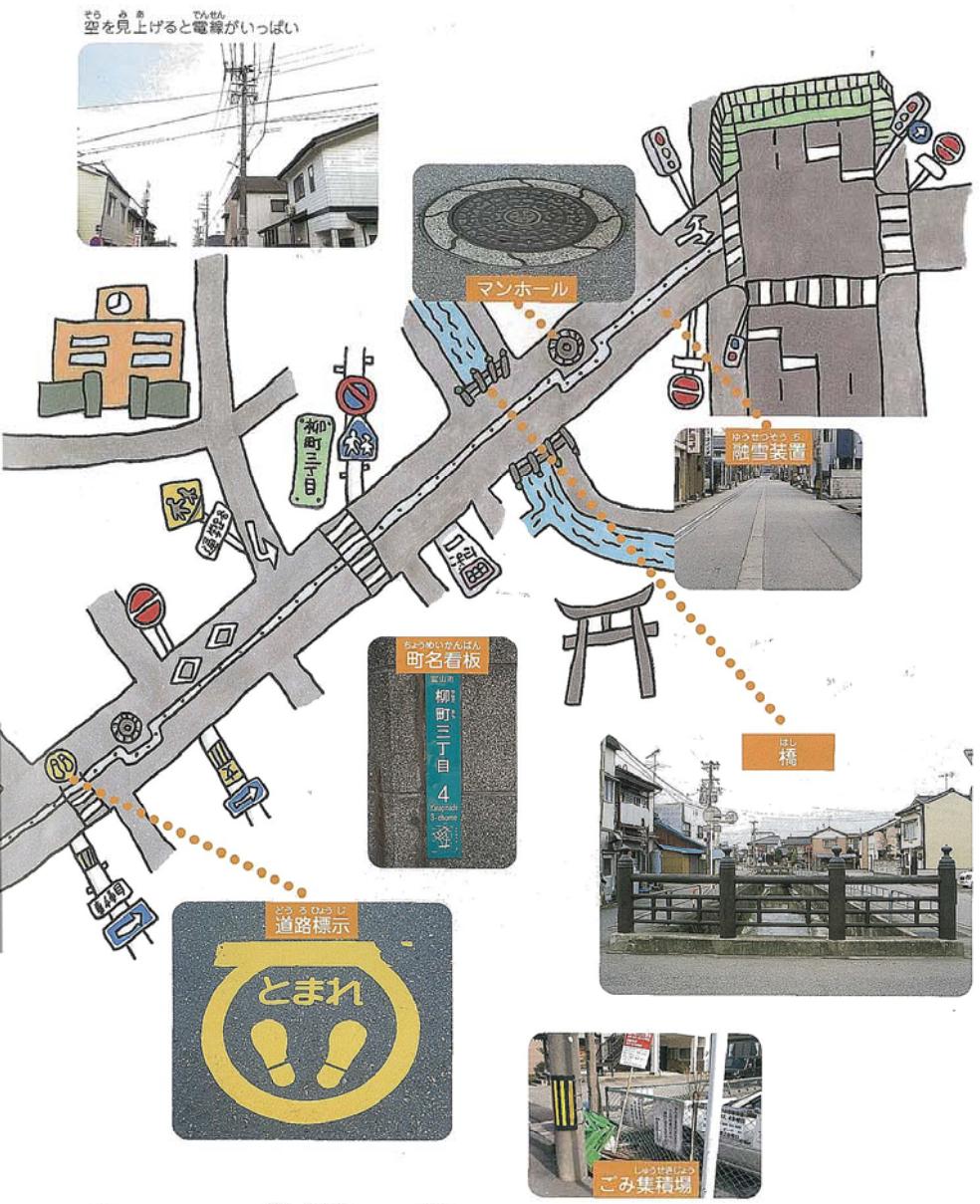
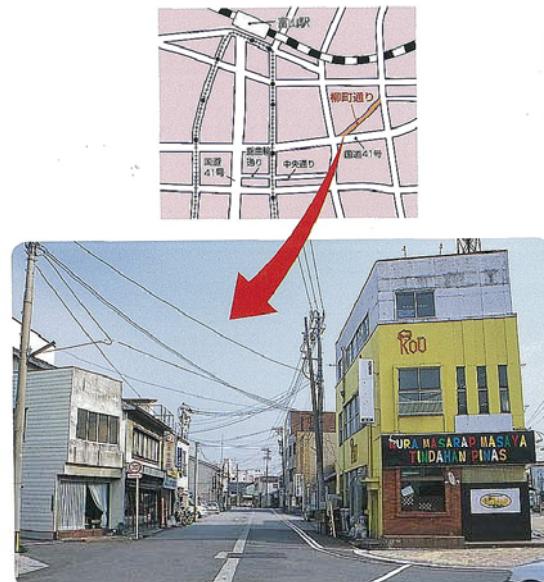
とお
みち
なに

いつも通る道には何があるのだろう

まいにち ある とお がっこう みち とお す 毎日歩いて通る学校への道。ふだんなにげなく通り過ぎているけれど、
ちゅうい ぶか かんさつ どうろ うえ いろいろ 注意深く観察してみると、道路の上には色々なモノがあることに気がつきます。
とやまし やなぎまち どよ だいさい ろじょうかんさつ ここでは富山市の柳町通りを題材に、路上観察をしてみることにしました。

路上観察マップを作ってみました

ろじょう あら なに しら とじょう 路上や道ばたに何があるのか、たんねんに調べて路上
かんさつ づく うりょう きめい うりょう うりょう 観察マップを作りました。道路標識やポストのように
おお 大きなものはすぐ目にとまるけれど、マンホールのよ
じめん めい じめん じめん うに地面に置かれたものは地味でなかなか目につきま
ふゆ かつ くわく ゆうせつ ちう せん 冬に活躍してくれる融雪装置も、雪のふらない
じき じき じき じき 时期は、そこにあることを忘れがちですね。



- どんなモノが、何の目的で、その場所にあるのだろう
- 色々な施設や器具は、誰が設置したものだろう

この道はどんな道なんだろう

道ぞいには、どんな建物があるのでしょうか。

誰が、どんなふうに道を

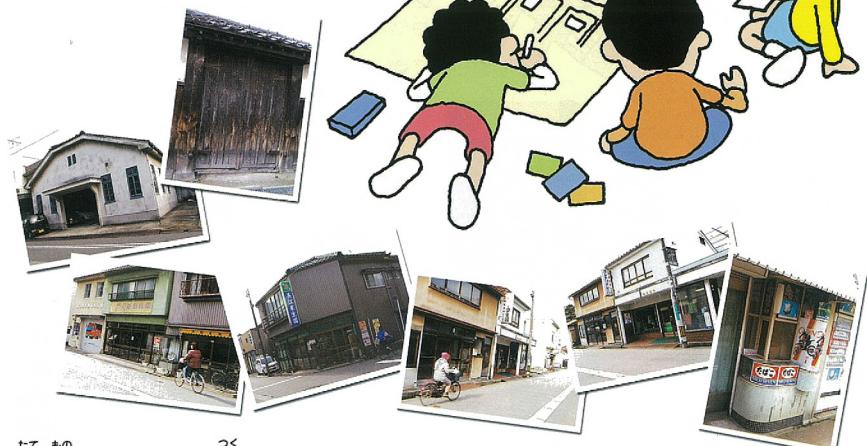
利用しているのでしょうか。

どこからどこまで、

つながっているのでしょうか。

いろんな角度から、

道を調べてみましょう。



建物マップを作ってみました

通りぞいの建物を調べて「建物マップ」を作ってみました。住宅、商店、会社、倉庫など
の建物が、新しいものから古いものまで色々建ち並んでいます。この通りには、古道具屋
さんやお茶屋さんといったお店が何軒かあります。今は住宅になっていますが、よく見ると、
お店をしていた頃の面影を残している建物もありました。

●道ぞいに多いのはどんな種類のお店だろう ●いつ頃からここでお店をしているのだろう



人や車の流れを観察してみました

朝は、あるひと歩く人や自転車に乗った人を多く見かけ

ます。会社や学校がはじまる時間になると人通

りは少なくなります。学校が終わる頃から夕方

にかけては、また人通りが増えています。柳町

通りは一方通行になっていて、1日を通して車は

それほど多くなく、ほとんどは乗用車です。

●通る人たちの服装や持ち物にも注目してみよう

●トラックや大型の車が通らないのはなぜだろう



道の探検に出かけました



●道ぞいの景色がどう変化していくか注意してみよう

●近所の道がどこに通じているのか、地図で調べてみよう

柳町通りをまっすぐ行く
とどこに行けるのかな。
東の方へ歩いていくと、お
店の数が減って住宅が多
くなっています。踏切
を過ぎると道はぱが少し
せまくなり、くねくねと曲
がった道になります。さ
らに進むと、古そうな家
が建ち並んでいる通りに
で出ました。ここまで来る
と、ちょっと別世界に来
たような感じです。

この道はいつからここにあるのだろう

お父さんやおじいさんが子どもの頃から、この道はあったのかな。

あったとしたら、その頃はどんな道だったのでしょうか。

家族や近所の人たちに、昔の道のようすをたずねてみました。

お父さんに聞いてみました

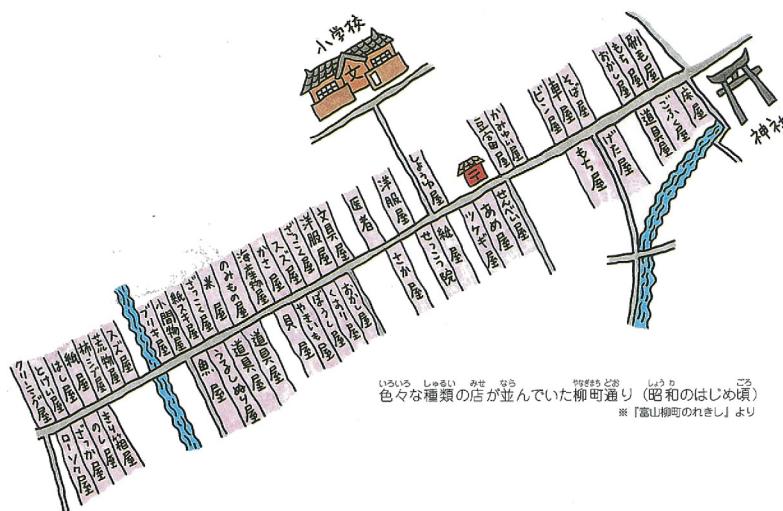
「お父さんが生まれた昭和38(1963)年は、『三八豪雪』というのがあった年なんだ。おじいちゃんの話では、道路が雪にうもれて、たいへん不便をしたということだ。その頃、この道は国道と呼ばれていて、バスも走っていたらしい。お父さんが小学生になつた頃、わが家にはじめて自家用車がやってきたのをおぼえているよ」



雪で交通がマヒしてしまった「三八豪雪」
※ 北日本新聞社提供



●融雪装置ができる以前、大雪のときはどうしていたのだろう
●アスファルトの舗装になったのは、いつからだろう



昔からやっているお店で聞いてみました

「柳町通りは昔、大きな『商店街』だったんだ。通りに面したほとんどの家が、何かの商売を営んでいたんだよ。今でもこの通りにお店が多いのは、そのなごりなんだ。スーパーができる前は、八百屋、魚屋、米屋、とうふ屋をはじめ、たくさんのお店があったけど、だんだん少なくなって、今は住宅やちがうお店になっていたりするね」

●いつ頃からお店が減っていったのだろう
●お店の数が少なくなったのはなぜだろう

近所のおじいさんに聞いてみました



於保多神社(天神さん)にある石橋は
もともとは富山城にあったもの

「柳町通りは昔からある『街道』で、江戸時代には、富山城の城下に色々な品物を運んでくる人たちでにぎわつたそうだ。このあたりにたくさんの柳の木があったことから、『柳町』という名前がついたのだと伝えられているよ。この通りにある神社には、富山城のお殿様もよくお参りにきていたそうだ。とても歴史のある道なんだよ」

●聞きとった話を年代順に並べてみよう

ひろ どう ろ なに 広い道路には何があるのだろう

いつも歩いて通る柳町通りから少しはなれたところに、

歩道と車道とが別になった広い道路があります。

静かなふんいきの柳町通りとはちがって、

この道はいつもたくさんの車が行き来していて活気があります。

ひろ みち くるま かず おお なが はや 広い道は車の数が多くて流れも速い

この道路は、道はが広いので2台の車が並んで走れるようになっています。それが両方向なので「4車線道路」と呼ばれます。制限速度は時速50キロメートルで、住宅街の道よりも車は速く走っているように感じます。トラックやバスといった大きな車も多いことに気がつきます。ときどき、富山県外のナンバーをつけた車も見かけます。



- 制限速度以外にはどんな標識があるのかな
- 交差点近くの「車線」はどうなっているだろう

かっ き みち け し き 活気があふれる道ぞいの景色

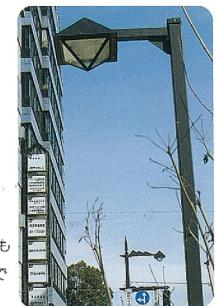


きれいな色の歩道にはバス停や電話ボックスもあります

●どんな街路樹が植えられているのだろう

●道路の上に電線がないのはなぜだろう

道ぞいには大きなビルが並んでいて、コンビニやガソリンスタンドといったお店があります。歩道にはきれいな色のブロックが敷かれています。歩道と車道のあいだには花壇があって、数メートルおきに街路樹も植えられています。また大きな街灯があって、夜も道路を明るく照らしています。



夜になると歩道にも明かりがともるので安心して歩けます

どこからどこまでつながっているのだろう

道路標識には「国道41号」と書かれていました。これがこの道路の名前のようにです。では、国道41号は、どこからどこまで通じている道なのでしょうか。歩道わきに立っているポールには「249」と「国道8号 I.Cまで5Km」という文字も書いてありました。「249」という数字は、この道路がはじまっている場所からの距離を表しているようです。富山市から249キロメートルというと、どのあたりになるのでしょうか。

●「41」という番号にはどんな意味があるのだろう

●ほかにどんな番号の国道があるだろう



おおきな道案内の
標識も見つけました



道路わきのポールは「キロポスト」という名前で呼ばれています

道ができた頃とどう変わったのだろう

図書館で本を調べていたら、

「国道41号」が作られてまもない頃の写真を見つけました。

今、北新町の交差点のあたりでしょうか。

現在の同じ場所の写真と見比べてみて、

何がどんなふうに変わったのかを考えてみましょう。



工事がはじまった頃の写真。左右に横切る石畳は路面電車の線路です。※『富山戦災復興誌』より



国道41号ができたまもない頃の写真 ※『富山戦災復興誌』より



今の北新町交差点。電線を歩道の下にうめる工事が進められています

●いつ頃の写真だろう

●道はばや道路のかたちはどう変わっただろう

●走っている車はどう変わっただろう

●道ぞいの景色はどう変わっただろう

自動車はいつから普及しはじめたのだろう

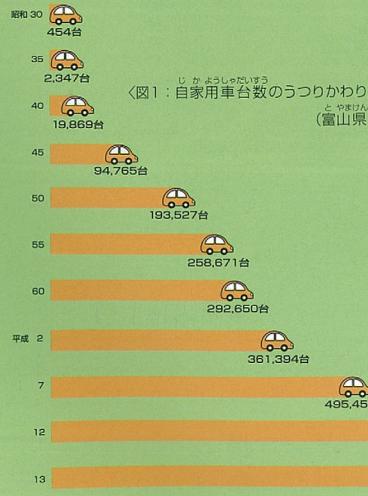
100年前にはなかった自動車

今から100年ほど前、20世紀になる直前に、はじめて富山に鉄道が登場しました。鉄道が登場する以前は、まだまだ人の足や馬車などが交通の主役でした。鉄道登場から15年ほどたった大正時代、ようやく富山と東京を結ぶ鉄道が開通しました。はじめて自動車が富山の道路を走ったのも、ちょうどその頃のことです。



明治41(1908)年に完成した富山停車場(現在のJR富山駅)
※「富山名所 停車場」(明治42年 高見印刷所) 富山市郷土博物館所蔵

50年前は500台にも満たない台数



国道41号が新しく作られた昭和30年代。この頃の写真を見ると、自動車があまり写っていないことに気ができます。昭和30年に富山県内にあった車の台数は、わずか454台。今なら一家族で2台、3台も持っていることもめずらしくありませんが、この頃は車を持っていることが、とてもめずらしかった時代でした。



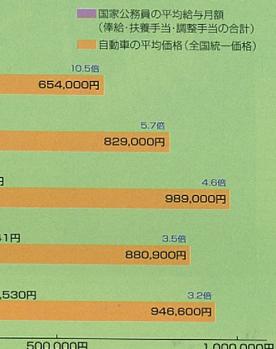
昭和30年の富山市内
(城址公園付近)
※「富山戦災復興誌」より

今はほとんどの家に自家用車があって、どこへ行くにも車が欠かせない世の中になっています。こんなふうに、みんなが自動車に乗るようになったのはいつ頃からのことでしょうか。
そもそも自動車が登場したのはいつ頃のことなのでしょうか。

ぐんと身近になってきたマイカー

昭和40年をすぎた頃から、富山県の車の数は急激に増えはじめました。昭和40年代のわずか10年たらずのうちにおよそ10倍にも増えています(図1)。自動車メーカーが、国民みんなの乗れる乗用車づくりに取り組んでいたのもちょうどこの頃で、高くて限られた人しか買えなかつた自動車は、ようやくふつうの会社員の家庭にも普及はじめました(図2)。

図2: 乗用車の台数のうつりかわり



富山県は全国一のマイカー王国



自家用車は家族の大切な宝物でした

図3: 1世帯当たりの自家用車保有台数(平成11年)



(図1)資料: 陸運統計要覧、富山県統計概況、各年度末数値
(図2)資料: 乗用車の平均価格は総務省「小売物価統計調査年報」公務員給与は人事院「国家公務員給与等実態調査」
(図3)資料: 中部運輸局富山運支局「富山県運載況」

◎ 道 の アルバム ◎



上:玉生 康博(1996佳作) 下:草山 弘(1997佳作) <北陸のみちフォトコンテスト入賞作品より>

第2章 道の昔へ旅してみよう



車のない時代はどうやって旅したのだろう

鉄道や自動車のなかった時代の人たちは、長い道のりも歩いて旅をしていたといいます。その頃の旅はどんなものだったのでしょうか。今の旅行やドライブとは、どんなところがちがっていたのでしょうか。

1時間でどれだけ歩けるかな

学校のグラウンドは1周200メートル。ゆっくり歩いて1時間に何周できるかを測ってみましょう。1時間に歩ける距離がわかったら、1日にどれだけ歩けるのかも計算できそうです。でも、1日といっても街灯のない昔のことです。夜はよほどのことがないと歩けなかつたはず。食事や休憩をする時間も必要ですね。

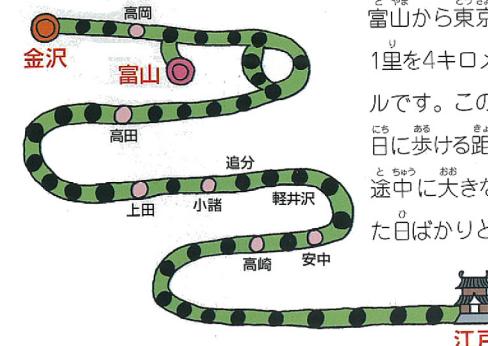


江戸時代の旅人の姿

※ 竜川書店刊『菩光寺遊名所図会』より

●大人やお年寄りの歩く速さもくらべてみよう

東京（江戸）までは何日かかった？



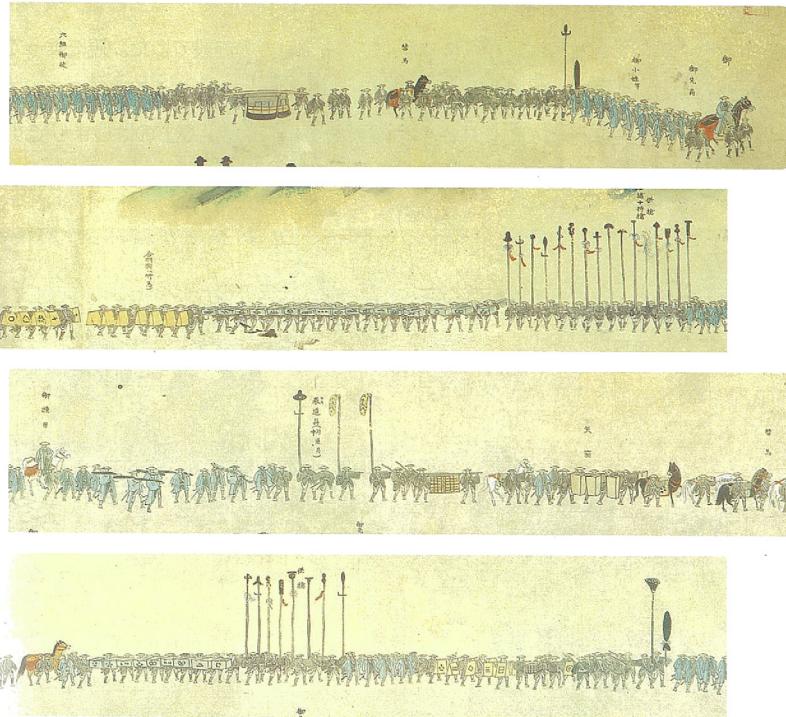
江戸に着くまでに、たくさんの町を通りました

富山から東京（江戸）までは昔の単位で100里あります。1里を4キロメートルとすると、およそ400キロメートルです。この道を何日かけて歩いたのでしょうか。1日に歩ける距離で割り算すればすぐ答えがでそうですが、途中に大きな川や険しい山もあります。天候に恵まれた日ばかりとも限りません。重い荷物を持つことも考えると、今想像するよりもずっと大変な旅だったのかもしれませんね。

●京都や大阪までは何日かかったのだろう

加賀のお殿様は10日から2週間でした

江戸時代には、各地の大名が年に一度、自分の藩と江戸を行き来する「参勤交代」という制度が定められていました。加賀藩のお殿様の参勤交代の記録を見てみると、金沢から江戸まで120里（約480キロメートル）の道のりを、10日から2週間ほどかけて歩いていたことがわかります。



加賀藩は大きな藩だったので、大名行列も立派なものでした

●どんな人たちが大名行列に加わっていたのだろう

つか やす 疲れたときはどこで休んだのだろう

いま、あち
今なら、道ぞいにはガソリンスタンドやドライブイン、
みち えき
道の駅といった施設があって、
さがる きうけい
いつでも気軽に休憩したり食事をとったりできます。
くま こう
車のなかた頃にも、そうした施設はあったのでしょうか。

えき むかし 「駅」は昔のガソリンスタンド

「駅」という鉄道の駅を思い浮かべますが、もともとは道の施設でした。馬に乗って旅をする人たちが、長い道のりを走ってつかれた馬を、元気な馬に乗りかえる場所のことです。奈良時代、大きな道のところどころに馬を飼う場所を置いたのが「駅」のはじまりです。江戸時代になると「駅」にあたる場所は、「問屋場」という名で呼ばれるようになりました。



宿場町には「問屋場」があって、荷物を運ぶ馬や人足を提供してくれました。※ 資料協力 UFJ銀行鈴木賞蔵館

とお い 遠くまで行くときはどこに泊まったのかな

もくでき ち なんにち ある むかし たび ば あい と ちゅう しゃくはく ば しょ ひつよう
目的地まで何日もかけて歩いていく昔の旅の場合、途中で宿泊する場所が必要になります。
そこで旅人がよく通る道ぞいには宿屋が登場しました。大名たちが利用する宿屋は「本陣」
と呼ばされました。大名以外の武士や庶民は、食事も出してくれる「旅籠屋」や自分でご飯
を作って食べる「木賃宿」に泊まりました。こうした宿屋がたくさん集まる場所は「宿場
町」として栄えました。



ながわ しきはん じこはくぶつかん
滑川市立博物館

ながわ しきはん でんわ 076-474-9200
開館時間／10:00～18:00
休館日／月曜日・第3曜日・祝日・年末年始・展示替営日

●旅にはどんな持ち物を持っていったのだろう

ながりまわし りづくぶつかん
滑川市立博物館には、昔の本陣や旅籠屋を
イメージした模型が展示されています

ちゅ や 「茶屋」はドライブインやコンビニの感覚



えどじだい りょうこうん にじゆよほんじがいすき
江戸時代の旅行本『二十四番順拝図絵』に
描かれた黒部川本橋の茶屋
※ 富山県立歴史博物館

たび ひと とお はしょ ちゅ よ
旅人がよく通る場所には「茶屋」と呼ばれるお店があ
りました。旅人たちは、ここでお昼ごはんを食べたり、
お茶を飲んでひと休みしたりしました。峠や川のほと
り、道が枝分かれする場所にも茶屋がありました。また
水の豊かな富山には、湧き水を利用した水飲み場がい
たるところにあり、旅人のオアシスとなっていました。

●どんなところに湧き水があるか調べてみよう

道に迷うことはなかったのかな

現代に暮らしている私たちは、道路標識やカーナビなどを利用して、道に迷うことなく目的地まで行くことができます。そうした便利な施設や機械のなかった時代、人々は何を道案内に旅をしていたのでしょうか。

どこまで歩いたか一里塚が教えてくれる

旅の目印として大いに役立っていたのが一里塚です。もともとは江戸幕府が、道の一里ごとにエノキなどの木を植え、塚などで目印を作るよう指示したのがはじまりです。一里塚は、馬やかごを利用したときの料金の目安にもなっていました。



県内ではただひとつ、昔の面影を残す朝日町境の一里塚

たよりにされていた道標(道しるべ)

道が枝分かれするような場所には、道の行き先を石に刻んだ道標が置かれていました。石で作った仏像の背中や土台に、道案内の文字を刻んだものもありました。こうした道標は、今でも古い道ぞいやお寺などに残っています。



北陸街道から市への道が枝分かれする場所にあった道標(富山市新庄町)



さまざまな道標が今も各地に残っています(左:富山市新庄町、右:大沢野塙町)



風よけ日よけにもなった「街道松」

大きな道ぞいには松や杉の並木が植えられていました。また、1町(およそ110メートル)ごとに大きな松を植えて、距離を知る目印にしていたところもありました。こうした松並木は「街道松」と呼ばれています。街道松は雪にうもれた道すじを示したり、旅人を強い風や日ざしから守る役割をもっていました。

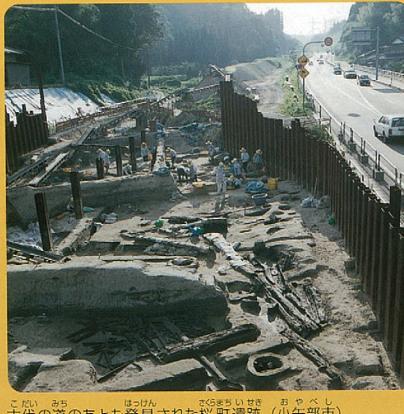


●身边に昔の道の目印が残っていないか探してみよう

黒部川の東岸、入善町上飯野に残る街道松

と やま みち 富山の道のうつりかわり (原始時代～江戸時代)

し せん みち じん こう みち 自然の道から人工の道へ



狩りや採集の暮らしをしていた昔、人がよく通る地面は足でふみかためられ、そこに自然の道が生まれました。稲作がはじまるといふと、農作業をしたり、作物を運んだりするための道が作られました。やがて大和朝廷が全国に力をおよぼすようになると、地方の産物を都へ運んだり、役人たちが行き来したりするための道も必要になってきました。この頃の北陸地方は「コシノクニ」と呼ばれていて、都とコシノクニを結ぶ道は「高志道」とも呼ばれました。



くに 国づくりのための道づくり

道路が国づくりにとって大切なものとなってきたのは、奈良時代からでした。都と地方を結ぶ7本の重要な道「七道」が定められたのがこの頃で、「北陸道」もそのひとつでした。この時代には「駅」という制度も新しく取り入れされました。「北陸道」などの重要な道には、30里(16キロメートル)ごとに駅を置き、連絡のための馬を飼わせていました。駅が置かれるところからの命令や地方からの情報がより早く伝わるようになりました。

かいどう たいせつ かがはん 街道を大切にしていた加賀藩

戦のたえなかつた戦国時代が終わると、道を行き来する人々の数が増え、各地で街道が整えられるようになってきました。加賀藩と富山藩は、おもな街道に一里塚や関所、宿場、道標、街道松などを置いて道の整備に努めました。また、参勤交代で通る道ぞいには「道番人」という役人を置いて、道のそじや修繕をさせていました。道番人は、全国でもほとんど見られないユニークな制度でした。



江戸時代の道中絵図 ※ 富山県立図書館蔵

えっ ちゅう かい どう 越中のおもな街道

【北陸街道】 関所のあつた境から俱利加羅峠まで、越中を東西に横切るもっとも大きな街道。街道ぞいにはたくさんの宿場があり、多くの人が行き来しました。加賀藩の参勤交代は、富山城下をさけたルートを通っていました。

【飛騨街道】 越中から飛騨へ塩や魚を運び、飛騨から材木などを運ぶ道として利用されていました。加賀藩領だった神通川右岸を通る「飛騨東街道」、富山藩領だった左岸を通る「飛騨西街道」の2本の道がありました。

【能登街道】 能登から能登と越中の結びつきは深く、魚や塩、田をたがやす馬などが、街道を通って取り引きされていました。海岸ぞいの道、峰越えの道などの何本ものルートがあります。

【五箇山街道】 五箇山から塙硝(火薬のこと)や和紙、生糸などを運んだ道で、庄川にそって井波へ向かう道のほか、峠を越えて城端、そして金沢と結ぶ道など、いくつもの道すじがありました。



街道の面影をたずねてみよう

たくさんの旅人が街道を行き来していた江戸時代。

遠い昔のことのように思われますが、

今、私たちが利用している身近な道にも、

街道のたたずまいや宿場町にぎわいと出会える場所が残っています。

宿場町だった場所を探してみよう

江戸時代、東西に通じていた北陸街道ぞいを中心に、富山県内（当時の越中國）には多くの宿場町がありました。現在は大きな町に発展したり、人の行き来が減ってさびれたところも

ありますが、注意深く見ると、古い建物や古い町並みがところどころに残っています。「御旅屋」や「旅籠町」といった地名にも、宿場町の面影を見ることができます。



大きな宿場町だった泊



かつて宿場町として栄えた泊の町並み

今も残る浜黒崎の街道松

富山市浜黒崎の海岸ぞいの道は、加賀藩のお殿様が参勤交代のときに通ったことから「殿様道」とも呼ばれています。この道ぞいには、街道の面影を残す松並木が今もあります。かつては道の両側3.6メートルごとに松の木が植えられていたようですが、枯れてしまつた木も多く、今は20本にも満たない数になっています。



●街道の面影が残る町並みが身近にないか探してみよう

朝日町の泊は、北陸街道の宿場町として栄えていた町のひとつです。親不知と黒部川という交通の難所にはさまれた場所にあり、すぐとなりの境には関所があったことから、たくさんの旅人が集まる宿場町に発展したようです。この町には、加賀藩の役人の住まいや米蔵なども置かれていました。

どうやって川を渡ったのだろう

富山県には大きくて流れの急な川が何本もあります。

今なら橋を渡ればかんたんに向こう岸に行くことができますが、

大きな橋のなかった昔は、どのようにして川を渡っていたのでしょうか。

神通川船橋とますのすし

かつて富山城のすぐ横を流れていた神通川には、64そうの舟を鎖でつなぎ、その上に板を渡した「船橋」がかけられました。神通川船橋は越中の名所として全国にも知られ、明治になって木の橋がかけられるまでの3世紀以上ものあいだ、富山の西の玄関口として利用されていました。現在の富山の名物といえば「ますのすし」ですが、この頃は船橋のたもとで売られていた「鮎すし」が名物でした。

船橋のたもとに置かれていた常夜燈
(富山市舟橋北町)



●なぜ木の橋ではなく船橋をかけたのだろう

黒部川と四十八ヶ瀬

200年ほど前まで、黒部川はたびたび洪水をくりかえすあばれ川でした。水かさが増える夏になると大小無数の流れができるから「四十八ヶ瀬」「いろは川」とも呼ばれ、交通の難所としておそれられていたのです。そこで水かさの増える時期は、上流にかけられた愛本橋まで遠回りする「上街道」が使われるようになりました。水かさが減って川を歩いて渡れるようになると冬は、海岸近くを通る「下街道」が利用されていました。

黒部川の上流にかけられていた
愛本はね橋



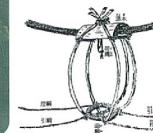
「四十八ヶ瀬」「いろは川」とも呼ばれ
交通の難所だった黒部川

渡し舟とかごの渡し



神通川の船橋は
雷山のシンボルでした
※ 富山市先美資料館収蔵
『越中国富山神通川船橋之図、名物あいのすし』

江戸時代の有名な浮世絵画家、広重も描いたかごの渡し
※ 富山市先美資料館収蔵 歌川広重画「六十余州名所回覧、飛驒・籠わたし」



かつて渡し舟が行き來していた「如意の渡」
今はフェリーボートが運行しています(高岡市伏木)

どうやって山を越えたのだろう

三方を山にかこまれている富山県には、たくさんの峠があります。

トンネルが作られるようになるまで、
旅人たちは険しい道を歩いて峠を越えていました。
今も街道の面影を残す古い峠道をたずねてみましょう。



千年の歴史の舞台「俱利伽羅峠」

俱利伽羅峠は、古代から越中と都とを結ぶ重要な道として利用されていました。平安時代の終わりには有名な源平合戦の戦場となり、江戸時代には加賀藩の参勤交代の行方がここを越えて江戸に向かいました。また多くの旅人でにぎわい、峠には10軒もの茶屋が店を出していました。明治になって北側の天田峠に新しい道が作られるまで、千年以上にもわたって、この峠はさまざまな歴史の舞台となっていました。



● 俱利伽羅峠をあまり使わなくなったのはなぜだろう

大切にされていた峠の街道



険しい山道を登ってきた旅人は峠茶屋で休みました

歴史の道を歩いてみよう

峠を越えるかつての北陸街道は、現在、気軽に散歩を楽しめる遊歩道に生まれ変わっています。道ぞいには、古墳や奈良時代の関のあと、源平古戦場といったたくさんの見どころがあります。道番人が住んでいた屋敷あとや峠茶屋のあと、宿場町として栄えた竹橋や廻生の町並みも、街道のにぎわいを今に伝えています。



峠道を守る道番人が暮らしていた
屋敷のあとも残っています



● 遊歩道を歩いて昔の旅を体験してみよう

関所というのは何をするところだろう

江戸時代の藩は、今の都道府県とはちがって

独立国のようなものでした。

となりの藩との境には「関所」が置かれ、
人や物の行き来がきびしく取り締まられていました。
どうして、関所が必要だったのでしょうか。



関所はどこにあったのだろう

越中には境（朝日町）、東猪谷（大沢野町）、西猪谷（細入村）、切詰（八尾町）の4力所に關所※
が置かれていました。このほかに「口留番所」と呼ばれる、關所をやや小さくした施設が4カ所ありました。加賀藩や富山藩の領地を出て、飛騨（岐阜県）や越後（新潟県）に行くときに
は、現在のパスポートにあたる通行手形を、關所や口留番所の役人に示すことが求められて
いました。

※正式には、幕府がおもな街道に置いたものを「關所」、藩が領内に置いたものを「口留番所」と呼びます。ただし、加賀藩と富山藩は、とくに重要な口留番所のことを「關所」と呼んでいました。

なぜ関所が必要だったのだろう

もともと関所は、加賀藩や富山藩の領地が侵略されないよう、
守りをかためるための軍事施設でした。やがて戦のない世の
中になってからは、領内の農民たちが勝手にほかの土地へ逃
げていかないよう、人の出入りをきびしく取り締まる役目も
もつようになりました。また、銀や火薬といった品物が密輸
されないよう見張ったり、道を通って運ばれる品物に税金を
かけたりすることも、藩の関所の大切な仕事でした。

●通行手形には何が書かれていたのだろう



●通行手形には何が書かれていたのだろう
関所を通る場合には
通行手形が必要でした(猪谷関所館)

加賀藩にとって重要な境関所



加賀藩領と越後の国境にあった境関所は、越
中でもとくに大きな関所でした。学校のグラ
ウンドほどの広さ(東西160メートル、南北70
メートル)の敷地には、蔵や牢屋などもありま
した。鉄砲や弓、槍といった武器がたくさん
備えられており、多いときで60人もの武士が
はたらいていたことからも、加賀藩がここを重要
な関所として考えていたことがわかります。

境
關所は、現
在の朝日町の
境小学校のあたりにありました

と やま みち 富山の道のうつりかわり (明治時代～昭和時代)

近代的な国づくりと道路

明治時代になって、西洋から新しい仕組みや考え方があがつぎつぎと取り入れられ、日本の社会は大きく変化しました。江戸時代の街道の多くも、近代的な国づくりを支える国道や県道として生まれ変わることになりました。富山県では、かつての北陸街道が国道と定められました。街道の多くは人や馬がすれちがえるほど広さしかなかったため、道はばを広げる工事が各地で行われました。



明治11年、眞利伽羅峠にかわって天田峠に新しい道が作されました

明治時代の富山の橋



富山市水橋の白岩川にかけられた立山橋
現在は東西橋と呼ばれています

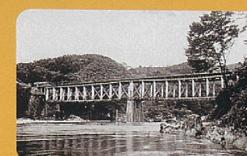
何本もの大きな川が流れている富山県ですが、江戸時代までは、橋のかかっている川はほんのわずかでした。明治になってようやく、地元の人たちの手で橋が作られるようになりましたが、そのほとんどは通行料をとる「貢取橋」で、しかもちょっとした洪水があると流されてしまう木の橋でした。誰でも自由に通れる、じょうぶな橋が作られるようになったのは、明治時代の後半から大正時代にかけてのことでした。

歴史を見守ってきた笹津橋

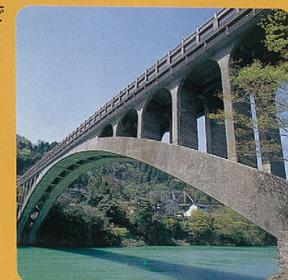
大沢野町と細内村のあいだを流れる神通川に、はじめて笹津橋がかけられたのは明治19年。しかしこの木の橋はわずか1年でこわれ、その6年後、近代的な技術を取り入れた新しい橋が作されました。大正になって鉄製のつり橋にかわり、昭和12年には四代目となるコンクリート製のアーチ橋が誕生しました。65メートルの美しいアーチはその当時、全国で2番目の長さをほこっていました。この橋のすぐとなりに新笹津橋ができたからは、歩行者と自転車の橋として利用されています。



初代の笹津橋（明治19年完成）



二代目の笹津橋（明治25年完成）



現在の笹津橋（昭和12年完成）

工業の発展と新しい都市づくり

自動車がはじめて富山に登場した大正時代の頃から、コンクリートやアスファルトを使った舗装道路が登場はじめました。富山でも工業がさかんとなり、自動車が走れる広い道路も作られるようになりました。しかし太平洋戦争がはじまり、富山市は空襲にあって焼け野原となってしまいました。戦争が終った翌年、傷ついた街や道路を直して新しい都市を作ろうとする計画がスタートしました。富山市を東西と南北に横切る、道はば50メートルの道路を作ろうというものです。



戦災で傷ついた富山市内。復興前の写真です
※「富山戦災復興誌」より

博物館へ出かけてみよう

どんな人が関所を通ったのだろう—猪谷関所館



猪谷関所館 ほそいりわらじのたに
細入村猪谷978番地 電話 076-484-1007
開館時間／9:00～17:00 休館日／月曜日・第3日曜日 入館料／一般150円・中学生以下無料

飛騨街道の関所のようすを知りたくて猪谷で出かけました。昔の面影を残す堂々とした門をくぐるとそこが猪谷関所館です。ここには、いつ頃、どんな人やどんな品物が関所を通っていったかという記録が残されていて、当時の飛騨街道のようすも絵で紹介しています。お殿様やお相撲さん、旅の商人や芸人など、色々な人たちがこの関所を通っていました。

「はね橋」はどんな橋だったのだろう—うなづき友学館



うなづき友学館では、かつて黒部川にかけられた愛本橋の模型を見ることができます。この橋は橋脚のないユニークな形の「はね橋」で、山口県の錦帯橋や山梨県の猿橋と並んで「日本三大奇橋」と呼ばれていました。

うなづき友学館 うなづきまちおおて 宇奈月町下立682 電話 0765-65-1010
開館時間／9:30～18:00 休館日／月曜日(祝日の場合は水曜日)・祝日の翌日・月末日 入館料／一般300円・中学生以下無料

富山県内にはいくつもの博物館があって、ふるさとの歴史の資料や大切な文化財を集めて展示しています。博物館に行けば、昔の道のようすを知るためのヒントや手がかりが、色々見つかるかもしれませんね。

昔の地図はどうやって作ったのだろう—新湊市博物館

旅をするときに地図は大切なものです。江戸時代、新湊で生まれた石黒信由という人は、越中・加賀・能登を歩いてくわしい地図を作った人物です。新湊市博物館にはこの人が作った地図のほか、地図づくりのための色々な道具も展示されています。



新湊市博物館 新湊市鏡宮299 電話 0766-83-0800
開館時間／9:00～17:00 休館日／火曜日・祝日の翌日 入館料／一般300円・中学生以下無料

川はばは、どうやって測る？

地面の上で距離を測るときは巻き尺などを用います。では、向こう岸まで巻き尺がとどかないような大きな川の川はばを測りたいときには、どうしたらよいのでしょうか。図のようなやり方をすれば、川を渡らなくて川はばを測ることができます。



神通川船橋のすがたを見てみよう—富山市郷土博物館



富山城の中にある富山市郷土博物館には、江戸時代に作られた越中の絵図がたくさん集められています。富山の城下町や街道のうつりかわり、神通川にかかっていた船橋のようすなども、ここで見ることができます。

富山市郷土博物館 富山市本丸1の62 電話 076-432-7911
開館時間／9:00～17:00 休館日／月曜日(祝日の場合は水曜日)・祝日の翌日・展示替期間 入館料／一般210円・小中学生110円(特別展は別料金)
土曜日・日曜日・祝日は小中学生無料

◎ 道 の ア ル バ ム ◎



雪の壁【中新川郡立山町】



散居の道【東砺波郡井波町】

上: 杉本 光庸(1999佳作) 下: 松岡 遼子(2001佳作) <北陸のみちフォトコンテスト入賞作品より>

第3章 道は何を運んできたのだろう



どんな人たちが道を通ったのだろう

たくさんの人たちが歩いてきた道には、人々が残したいくつものドラマがあります。みなさんよく知っている歴史上の有名人も、富山の道を通った旅人の一人。どんな人がどんなドラマを残していったのでしょうか。

越中と能登の各地を歩いた歌人—『万葉集』と大伴家持

万葉の歌人として知られる大伴家持は、奈良時代に国守として越中にやってきました。この頃すでに「北陸道」は、奈良の都と越中を結ぶ重要な道として利用されていました。家持は、国守として越中の国内を見まわる仕事をしながら、たくさんの歌を作りました。歌の舞台となった場所は、越中はもちろん能登にもおよんでいます。家持は、どんな道を歩いて歌を作ったのでしょうか。



二上山の山頂に立っている大伴家持の像

歌舞伎の題材にもなった渡し舟—「如意の渡」と義経・弁慶



平安時代の終わり頃、京の都を追われた源義経と弁慶は、奥州（今の東北地方）の藤原氏のもとへ逃れるために越中を通りました。一行が身分をかくして渡し舟に乗ろうとしたとき、義経たちではないかと疑う者が現れました。しかし、弁慶が機転をきかせて無事に川を渡ることができたといいます。これが歌舞伎「勧進帳」にもなった「如意の渡」の伝説です。

小矢部川のフェリー乗り場にある「如意の渡」の像（高岡市伏木）

越中の風景をよんだ一句—「奥の細道」と松尾芭蕉

江戸時代の俳人松尾芭蕉は、江戸から東北、北陸をめぐって岐阜県の大垣にいたる長い旅の記録を、紀行文『奥の細道』につづりました。芭蕉が北陸街道を通って越中に入ったのは元禄2(1689)年の7月のこと、「わせの香や分人右は有磯海」という俳句を残しています。どこでこの句をよんだのかは今でも謎とされています。

五七五の俳句で「わび」「さび」の世界を表現した松尾芭蕉



近代産業を支えた女性たち—「野麦峠」と製糸工女



製糸工場では、10代になったばかりの小さな娘たちも働いていました

* 無文出版社刊『長野県美術全集』より

生糸の生産は明治時代の日本を支えた代表的な産業でした。富山県からも若い女性が、長野県にあった製糸工場へ出かせぎに行きました。映画などで有名な野麦峠を越えて、諏訪や岡谷の工場へ行った人もいました。

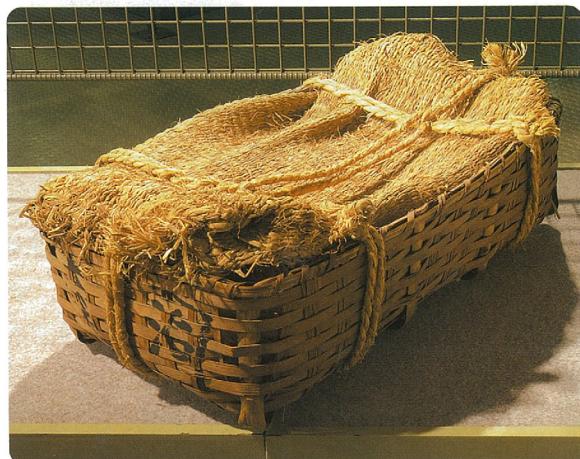


関所を通った人々（西猪谷関所の記録より）

かがはんとやまんやくにんたはんぶしろうにんじしゃしゃうひとあさんどじしゃさんけいひとそう
加賀藩・富山藩の役人、他藩の武士、浪人、武者修行の人、商人、寺社参詣の人、僧、
あましんじくこじぞうじょけいんがんにんばうずせんがくナモジひさきいしゃがくはちからも
尼、神職、虚無僧、出家人、願入坊主、天学主、鑄物師、飛師、医者、画家、歯力持、
いあいなみえきしゃげいしゃぐんじょがたりすもうりょうじちゅうじちゅうじんごうちほんいんばうしきざし
居合抜、易者、芸者、軍書語、相撲取、行司、茶人、碁打（本因坊）、将棋指.....

どんな品物が運ばれたのだろう

うみ やま やま さと むかし みち
海から山へ、山から里へ。はるか昔から道は、
さまざまな土地でとれた産物が行き来する大切な交易ルートでした。
馬や牛にかつがせたり、人が背負ったりしながら運ばれた品物は、
どんなものだったのでしょうか。



海のない飛騨でなぜ「ブリ」が名物?

古くから信州では、ブリは縁起のいい魚とされてきました。とくに高山から運ばれてくる「飛騨ブリ」は、これなしでは年が越せないと言われるほど、大切な食べものでした。この「飛騨ブリ」、もともとは富山湾でとれたブリを塩づけにしたもので、「ポッカ」と呼ばれる人たちが背中にかつぎ、飛騨街道を通って高山へと運ばれていました。高山に運ばれるまでブリは「越中ブリ」と呼ばれました。これが、高山から野麦峠を越えて信州へと運ばれていくときに「飛騨ブリ」の呼び名になったようです。

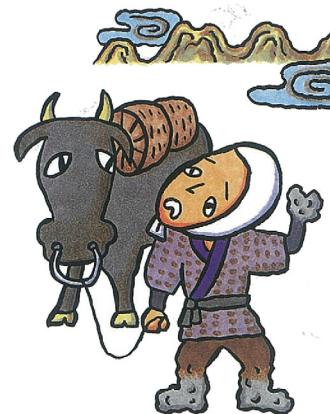
●飛騨や信州から越中へは、何が運ばれていたのだろう



とやまわん
富山湾でとれたブリは、タケで編んだ
「ブリカゴ」に入れて運ばされました

※ 水見市立博物館蔵

石になった塩売りの話 (高岡市の昔話)

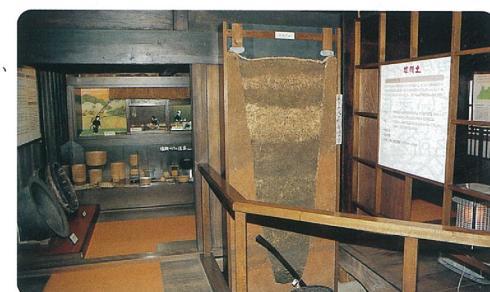


えどじだい
江戸時代、加賀藩では、塩の売り買いを藩が管理して
いたので、自由に手に入れることができませんでした。
しかし能登に近い村では、海辺の村から来る塩売りが
らっこりと塩を貢うこともできました。塩は高く売
れたので、塩売りは塩に白い砂をませて売ればもっと
大もうけができると考えました。そんなことを知らな
い村の人たちはよろこんで塩を買ひ、塩売りはまんまと
大金を手にしました。しかし、塩売りが山道を通って
帰ろうとしたとき、ついに天の神様の罰が当たりまし
た。塩売りの体は石になってしまったのです。



合掌づくりの里は火薬工場?

しょくわ 昭和になって新しい国道やトンネルができる前まで、五箇
山はまさに「秘境」といえる場所でした。江戸時代、加賀
藩は人里から遠くはなれたこの土地に、罪人を入れる流刑
小屋を置いたり、「塩硝」と呼ばれる火薬の原料を住民に作ら
せたりしていました。五箇山と城端、福
光を結ぶ街道はほかにもありましたが、
「塩硝」は、ブナオオカツや医王山のふもと
を通る「塩硝街道」を通って、直接金沢
の城下まで運ばれていました。



かみいちむらすがなまがっしきづく
上平村菅沼合掌造り集落には
さんしょくつくのかたしゃがい
塩硝の作り方を紹介する「塩硝の館」があります

人や品物のほかに何が運ばれたのだろう

ひと もの の 行き 来が 活発 なって くると、
それにも なって、 いろんな 土地 の 文化 や 風習 、 情報 といった
カタチ の ない もの で 通つて 伝え られる よう な ります。
いろんな 土地 の 文化 が 出会つて、 新しい 文化 が 生まれる こ も あ りま し た。

「麦や節」で結ばれた能登と五箇山



うご とくちょう むぎ ぶし
きびきびとした動きが特長の「麦や節」のおどり

五箇山地方に古くから伝わる民謡で「こきりこ」と並んで有名なのが「麦や節」です。実は、この唄とよく似たふんいきの民謡が、能登半島の輪島や七尾にも残っています。輪島塗の原料である「うるし」を求めて、能登と五箇山を行き来していた商人たちによって伝えられたのではないかと考えられています。陰深い山道しかなかった昔にも、能登と五箇山のあいだには深い文化の交流があったようです。

「売薬さん」は娯楽も運んだ

まだテレビもラジオも新聞もなかった江戸時代、人々は富山の売薬さんから見知らぬ土地の色々な話を聞いて、イメージをふくらませていました。また売薬さんは、人気のある役者の似顔絵や各地の名所を描いた「売薬版画」を、お客様へのみやげとして持っていました。身近に娯楽があまりなかった時代、売薬版画はうれしいプレゼントだったに違いありません。

名所の風景や役者の姿を描いて人気のあった売薬版画
※ 富山市売薬資料館収蔵 松浦守美画「市川団十郎の松王丸」



江戸時代、全国に広まった立山信仰

富山のシンボルである立山は、古くから信仰の山としてあがめられてきました。江戸時代には、立山に参詣する人たちが通る道も何本かでき、道ぞいには「立山道」と書かれた道標



が立てられました。
たて やまと しん こう
やがて立山への信仰
は、「立山曼荼羅」な
どを使った布教活動
によって全国にも広
まりました。多いと
きには1年に6~7千
人の人たちが参詣
におとずれていたと
いいます。

たて やまと しん こう
立山曼荼羅は、立山にあると
かが 考えられていた地獄のようを
描きました

※ 個人蔵、写真:富山県[立山博物館]提供

さまざまな情報が行き來した街道

電話はもちろん郵便もなかった江戸時代、遠くに住む人にメッセージを伝えたいときには、「幸便」が利用されました。「幸便」とは、お寺や神社参りの旅をする人や商いで旅をする人にたのんで手紙を運んでもらうことをいいます。やがて手紙を運ぶことを商いとする「飛脚」が発達してくると、街道を通ってさまざまな情報がやりとりされるようになりました。

●江戸から富山まで、何日ぐらいで手紙が届いたのだろう



「道」のつく言葉を探してみよう

道 具
どう ぐ

道 草
みち くさ

道 樂
どう らく

道 筋
みち すじ

柔 道
じゅう どう

報 道
ほう どう

道 德
どう とく

水 道
すい どう

●「道」という字は、どんな意味で使われているのかな
●ほかにも「道」のつく言葉がないか探してみよう

道というと、私たちはまず道路のことを思い浮かべますが、ほかにも色々な意味あいで、道という言葉を使っています。道のつく言葉を集めてみたら、私たちと道の、深いかかわりが見えてくるかもしれません。

ことわざの中にも「道」を発見

生活の知恵や生き方のヒントなどを、わかりやすく教えてくれることわざ。その中にも「道」という言葉がたくさん出でます。私たちの生活と深くかかわっている道は、ことわざの中で、どんなふうに親しまれてきたのでしょうか。

一芸は道に通ずる

老いたる馬は道を忘れず

千里の道も一歩よりおこる

●ことわざの意味を調べてみよう

●どんな時に使うのかな

ちょっと道草

「おうらい」と「おうかん」

富山のお年寄りの中には、道のことを「おうらい」と呼ぶ人もいます。「おうらいで遊ぶときは車に気づけられ」というふうに使います。「おうらい」というのはどんな字を書くのでしょうか。また「おうかん」という古い呼び方もあるようです。加賀のお殿様が参勤交代で通った道のことを「往還」といいますが、それと何か関係があるのでしょうか。



道にまつわる昔話を読んでみよう

黒部川は大蛇も住むあばれ川

大蛇のお嫁さんになった娘

愛本橋のたもとの茶屋の娘が、ある日やってきた若いさむらいに気に入られ、お嫁にいきました。それから3年後、娘は子どもを産むため里帰りをしましたが、「決して中を見ないで」と部屋にこもりきりでした。心配した母が見にいくと、そこには赤ん坊を産んだばかりの大蛇がいました。母の悲鳴で大蛇は娘の姿にもどり、「私は黒部川の主の大蛇の嫁になりました。もう会うことができません」とつづきました。娘は最後に、年老いた両親に茶屋で売る「ちまき」の作り方を教え、ふたたび大蛇に姿を変えて黒部川へと帰っていました。



みち

むかし はなし

よ



おじいちゃんやおばあちゃんの時代より、もっともっと昔の話。

富山のまちや村に伝わる昔話の中から、

私たちの知らない頃の暮らしや道のようすを想像してみましょう。

峠は もののけ たちのすみか

キツネにだまされたムジナ

八尾の奥にある室牧谷の峠にはムジナがいて、いつも村人たちを困らせしていました。それを聞いた村の稲荷堂のキツネは、ムジナをこらしめてやろうと考えて「明日、オイラが殿様行列に化けて峠を見にこい」といいました。あくる日、ムジナは殿様行列の前に飛び出して「キツネめ、うまく化けたじゃないか」とさけびました。実はその行列は本物の殿様で、ムジナはさむらいたちにあっけなくやっつけられてしまいました。



昔の道のネットワーク

川に帰っていった竜

水見のお坊さんが庄川峠の川原で珍しい石を拾いました。あくる日、金屋村（庄川町）に出て山を越え、水戸田（大門町）に出たとき、とつぜん雷が鳴って大雨がふりだしました。坊さんは道をいそぎ、神通川を渡って水橋（富山市）に着いたのですが、袋に入れておいたはずの石はどこにもありませんでした。拾った石は竜が姿を変えていたもので、水戸田で雷を起こし、天に登って住みなれた庄川峠へと帰っていました。



今ま
ひと
まち
ひと
このりょう
山の人と町の人の交流

山の男の知恵に負けた魚屋

あるとき有峰に住む山の男が、魚を貰いに町の魚屋をたずねました。ところが町の魚屋は「大きい魚は山へ行きたくないというとる」といい、山の男に一番小さな魚しか売ってくれようとしません。それならばと山の男は「大きいお金は出ていきたくないというとる」といいかえし、サイフの中にあった一番小さな銭だけをはらって、小さな魚を買ってきました。魚屋は、山の男の知恵に負けて大きなソンをしてしまいました。

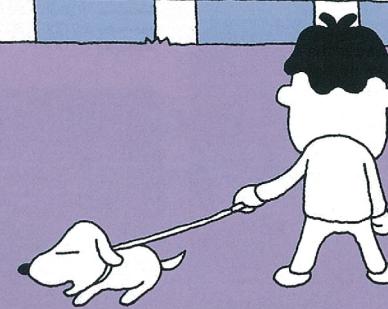
命がけだった峠越え

ボッカをのんだ人喰い谷

五箇山から城端へ向かう峠に、体を横にしないと歩けないくらい細く、ちょっとつまずいただけで谷底に落ちてしまうあぶない道がありました。荷物を運ぶボッカたちはこの道を、ネンジョウというつえをつきながら行き来していました。ある冬、峠になだれが起きて、あたりのものすべてを深い谷底につき落としてしまいました。春になり、雪がとると、川下の村にはたくさんのネンジョウが流れてきました。それからこの谷は「人喰い谷」と呼ばれようになりました。



第4章 今
の道、
これか
らの道

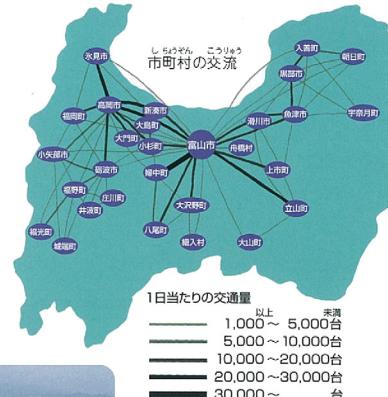


国道は何を運んでいるのだろう

かつて「街道」と呼ばれ、人やモノや情報の交流をはぐくんできた道の中には、現在、国道となっている道もたくさんあります。こうした国道はどんな人たちに、どんなふうに利用されているのでしょうか。

富山の人は国道をどう使っているのだろう

富山県内には、富山市や高岡市を中心につくらんの会社や工場があります。朝や夕方になると、マイカーで通勤する人たちの車がたくさん国道を通ります。自家用車を持っている割合が全国トップの富山県ですが、人口千人当たりの自動車貨物輸送トン数も北海道、長野について全国3位。それだけ自動車や道路は、私たちの暮らしと深くかかわっているといえます。



都道府県名	順位	人口千人当たり自動車貨物輸送トン数 (平成3年)
北海道	1	88.7 (千トン)
長野	2	67.9 (千トン)
富山	3	66.2 (千トン)
東京	47	25.1 (千トン)

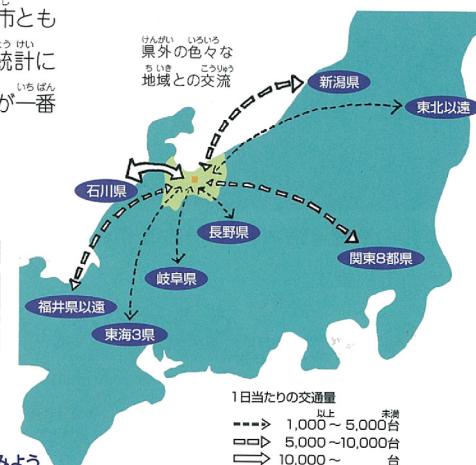
自動車貨物の輸送トン数

富山の国道を通るのはどこの人？

国道ぞいの大きなドライブインに行くと、富山県外のナンバープレートをつけた車がとまっているのをよく見かけます。富山県は石川県・新潟県・岐阜県と国道で結ばれていて、福井県や長野県、東京・大阪・名古屋の3大都市とも国道を通して深く結びついています。統計によれば、富山県と国道を利用した行き来が一番多いのはおとなりの石川県でした。



● 国道ぞいの道の駅やドライブインで出入りする車のナンバープレートを調べてみよう



どんな物がどこへ運ばれているのだろう

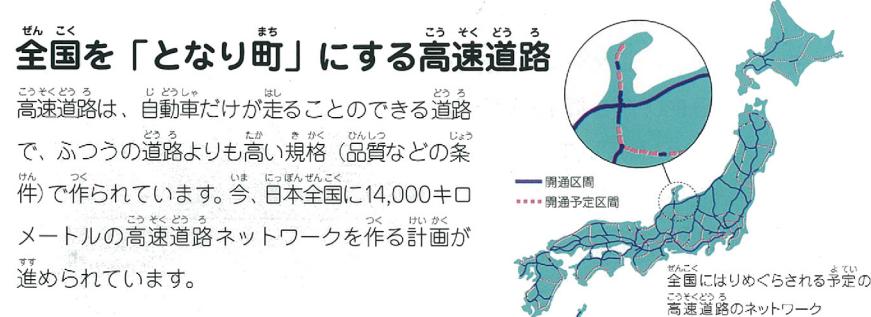


● スーパーに並ぶミカンやイチゴが、どんな道のりで運ばれてくるのか調べてみよう

国道では、たくさんの荷物を積んだ大型のトラックをよく目にします。タンクローリーやトレーラーも走っています。どんな荷物を積んで走っているのでしょうか。たとえば富山湾でとれたお魚は、漁船から港におろされたあと、どこへ運ばれていくのでしょうか。スーパーに並んでいるくだものは、どこからどうやって運ばれてくるのでしょうか。

高速道路はどんな道だろう

ちょっとドライブで遠出をしようとか、金沢までショッピングに行こうというときなどに、
高速道路を利用することがあります。便利で快適な高速道路は、
ふつうの道とどんなところがちがうのでしょうか。また、いつ頃にできた道なのでしょう。



北陸自動車道、東海北陸自動車道、能越自動車道が交わる
小矢部・砺波ジャンクション

●高速道路でお金を払うのはなぜだろう

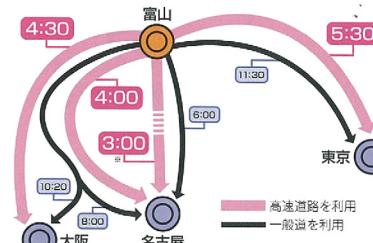
富山の高速道路はいつ頃できたのだろう

富山県にはじめて高速道路ができたのは1973(昭和48)年でした。このときはまだ、北陸自動車道の小杉インターチェンジと砺波インターチェンジのあいだだけの開通でした。このあとつなぎと建設が進められ、北陸自動車道は、現在すべての区間が開通しています。東海北陸自動車道と能越自動車道は今も建設が進められていて、すべての区間が完成すると、日本海側と太平洋側の地域が一本の高速道路で結ばれることになります。



能越自動車道は高岡から氷見への区間に建設中

高速道路ができると何が変わるのでだろう



高速道路には信号がなく、快適なスピードで走ることができますので、ふつうの道を通るよりも早く、ずっと遠くまで足を伸ばすことができます。高速道路を利用すればドライブや仕事で活動できるエリアもぐんと広がります。となりあう県はもちろん、これまであまり行き来のなかった東北地方、そして東京・大阪・名古屋の3大都市とも、さらに交流が深まっていくことでしょう。

道路の種類と役割

道路はその役割におおじて、住宅地の中にあるような「生活道路」、たくさんの車が行き来する「幹線道路」、広い地域を結ぶ「高速道路」という3種類に大きく分けることができます。地図を見ながら、どこに、どんな役割の道路があるのかを調べてみましょう。

未来の道はどんな道なんだろう

車に乗ったら、行きたい場所をコンピューターにリクエストして、

あとはぜんぶおまかせ。

混雑した道を自動的にさけてスピード一気に目的地まで。

そんな夢のような交通システムが、もうすぐ実現するかもしれません。

ドライバーが楽ちんできる自動運転システム

ドライバーは何もしなくても、車が自動的に運転してくれる便利なシステムです。車についているセンサーが、道路やほかの車から発信された情報をキャッチして、コンピューターで判断。車線やほかの車との間隔を守ったり、危険をさけたりしながら、安全に目的地まで走ります。この自動運転システムが実現すると、人のミスによって起こる事故を大はばに減らすことができます。



未来の道路は環境にもやさしい



事故や障害物の情報も教えてくれるので見通しの悪い場所でも安心です

カーナビをつけた車が増えています。今いる場所や目的地までの道順を教えてくれるので、とても便利です。これからはカーナビがさらに進化して、交通事故や交通渋滞などの情報を、車の中でいち早くキャッチできるようになります。混雑している道をさけたり、空いている駐車場をすばやく見つけたりもできるので、ドライブはいつも快適。渋滞が減るので、燃料のムダ使いや大気汚染の防止も期待できます。

●未来の道路のイメージを自由に描いてみよう

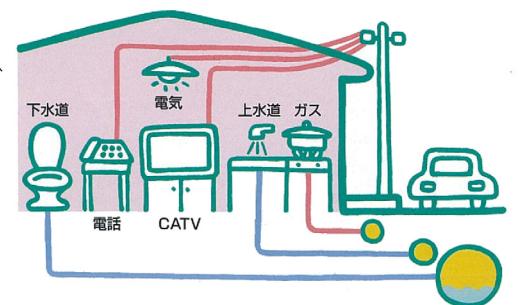
道路の下にもハイウェイがある

いつも使っている道路の下で、今、新しいハイウェイが作られています。新しいハイウェイとは、情報を光にかえて伝える光ケーブルのこと。車や人は通れませんが、たくさんの情報をものすごいスピードで伝えることのできる「情報の高速道路」です。このハイウェイを使えば、テレビ電話やインターネットはもちろん、家にいながら最新の映画やゲームを楽しむこともできるようになります。



道路は大切なライフライン

私たちの暮らしに欠かせないライフラインです。これらは、道路の上に張られた電線や道路の地下に設けられたパイプなどを通って、私たちの家まで届けられています。道路は、人や車の通行だけではなく、ライフラインの通り道という大きな役割ももっています。



◎道のアルバム◎



スカイライン【中新川郡立山町】



市内電車の通る道【富山市】



飛越街道【上新川郡大沢野町】



夕陽に輝くステンドグラス【新潟市】

富山の道と できごと

時代	年	できごと	写真
古代		富山県をふくむ一帯が越の国と呼ばれるようになる 北陸道に「駿」が置かれる 越の国が越中・越前・越後に分かれる	
中世		大伴家持が越中の国守になる 今の富山県の範囲が越中国に定まる 源氏と平家が備利伽羅峠で戦う 源義経が越中を通り	
近世	1585	越中や加賀で一向一揆が起こる	
	1601	加賀藩前田家が越中・加賀・能登を支配する	
	1604	加賀藩が北陸街道に松並木を植える	
	1606以前	街道ぞいに一里塚が置かれる	
	1615	神通川に船橋がかけられる	
	1639	街道ぞいに宿場町が置かれる	
	1662	富山藩ができる	
	1689	黒部川に愛本橋がかけられる 松尾芭蕉が『奥の細道』の旅で越中を通り	
	1824	富山藩主前田正甫が薬莢を奨励する	
	1858	石黒信由が越中・加賀・能登の地図を作る	
明治11	1878	安政の大地震で越中が大きな被害をうける 明治天皇が北陸の見まわりにおとずれる	
	1883 16	富山県が誕生する	
	1897 30	富山ではじめて鉄道が開通する	
	1903 36	神通川の流れを変える工事が完成する	
大正2	1913 たじょう	北陸本線が開通する	
	1913 2	富山市に市電が誕生する	
	1913 2	富山の道をはじめて自動車が走る	
	1914 3	富山でバスが営業をはじめる	
	1917 6	富山にはじめてタクシーが登場	
	1918 7	米騒動が起こる	
昭和1	1926 しひわ	富山市や高岡市で都市計画がはじまる	
	1933 8	富山飛行場が完成する	
	1934 9	高山線が開通する	
	1938 13	木炭バスが登場する	
	1945 20	富山市が空襲にあう	
	1946 21	戦災からの復興がはじまる	
	1952 27	富山県の東西を結ぶ国道8号になる	
	1958 33	富山と名古屋を結ぶ道が国道41号になる	
	1963 38	「三八豪雪」で大きな被害をうける	
	1965 40	歩道橋が登場する	
	1967 42	国道8号の備利伽羅トンネルが開通する	
	1971 46	富山と高岡を結ぶ国道8号バイパスが一部開通する	
	1973 48	北陸自動車道が一部開通する(富山県内初の高速道路)	
平成4	1992 へいせい	東海北陸自動車道が一部開通する	
	1996 8	能越自動車道が一部開通する	

国土交通省北陸地方整備局
富山工事事務所



年	組	名前
---	---	----